

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：23304

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K20527

研究課題名（和文）高度情報化時代に適応する権威主義国家：湾岸産油国の事例から

研究課題名（英文）Authoritarian Governments and Their Transformation in the Era of Digitalization:  
Case of the Arab Gulf States

研究代表者

千葉 悠志 (Chiba, Yushi)

公立小松大学・国際文化交流学部・准教授

研究者番号：70748201

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高度情報化時代に対する権威主義国家の適応を、世界的に見ても情報化が進む湾岸産油国の事例分析から論じた。とくに、本研究では「アラブの春」を前後としたメディアに対する、あるいはメディアを通じた統制監視手法の連続性とその高度化という問題に着目した。他地域の事例も参考にしながら、情報化が権威主義国家を強化する可能性や条件を探った。本研究を通じて、経済力を高めた湾岸産油国は、急速な情報化を遂げ、多くの国では情報部門の民営化が進んでいることが明らかとなった。その一方で、どの国でも政府が民間企業を通じた情報統制の方法を高度化させており、情報自由化を統御している実態が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、大きく3点に集約できる。第1に、情報化と情報部門の民営化がともに進む湾岸産油国において、権威主義的な政府がメディアを管理統制するメカニズムの一端を解明することができた。それにより、権威主義体制下のメディアについての研究に理論的貢献ができたと考えられる。第2に、湾岸産油国のメディアと政治の関係を解明できたことで、中東の政治を考えるうえでの新たな視角を提供できることができた。第3に、論文を中東のメディアと文化に関する国際的なハンドブックに掲載できたことで、研究成果を国内だけでなく、国外にも広く発信することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate how authoritarian governments have responded to the evolving media landscape and digitalization, with a specific focus on the oil-producing Arab Gulf countries. This study examined the continuity of government control over media entities and journalists during and after the “Arab Spring,” and explored the conditions under which digitalization strengthens authoritarian regimes. The findings reveal that Arab Gulf governments, bolstered by their economic strength, swiftly embraced new media technology, often privatizing their media sectors. Simultaneously, this study revealed that these governments tightened their grip on information through private enterprises, implying a limited effect of media privatization on democratization.

研究分野：中東地域研究

キーワード：中東 メディア 湾岸産油国 情報化 民営化 デジタル化

### 1. 研究開始当初の背景

権威主義国家とメディアを対象とした先行研究は、メディアの発達を民主化と絡めて論じたものが多く、そこでは情報化に直面した権威主義国家の劣勢が強調されてきた。一方で、そうした研究を「民主化バイアス」を帯びたものだと批判して、情報化にはむしろ権威主義国家の持続を助ける側面があると主張する論者もいる。欧米を中心に発達した政治コミュニケーション研究は、民主主義体制下のメディアに関する理論構築には熱心であったが、権威主義体制下の状況については等閑視する傾向にある。こうした先行研究の問題点を意識して、1990年代以降には「メディア理論の脱西欧化」を求める声も高まったが、権威主義国家とメディアとの関係が論じられる場合には、情報化時代に劣勢に立たせられた国々との前提がとられる場合が多い。また、近年の政治コミュニケーション研究の発展を考えるうえで重要な、D.ハリンと P.マンチーニによる「比較メディア・システム研究」でも、民主主義国家のメディア分析が中心であり、権威主義国家を対象とした議論は驚くほど進んでいない。しかし、今日の世界的な状況を考えて場合、こうした前提自体の見直しが必要であることは明らかである。とくに、権威主義国家の復権とさえ言える世界的な政治状況の変化に鑑みれば、権威主義国家と情報化の関係についての従来の政治コミュニケーション研究の前提や理論の刷新は喫緊の課題である。また、そうした新たな理論によって、現在の世界中で起きている現象を正確に理解することが肝要である。

本研究は、この問題をとくに石油資源から得られる莫大な富で潤う湾岸産油国(サウディアラビア、UAE、カタール、バハレーン、クウェート、オマーン)の事例分析から論じた。これらの国々のインターネットやスマートフォンの普及率は、日米欧以上であり、その意味では高度情報化時代の最先端を行っている。それにも拘わらず、このなかに「アラブの春」を通じて政変が生じた国はひとつもなかった。そればかりか、抗議運動が生じた場合でも比較的早期に鎮圧されていた。その理由の一つには、これらの国々の情報操作能力の高さを指摘できる。唯一、大規模な抗議運動が起きたバハレーンでも、その鎮圧後には新たなメディア状況へと対応すべく、統制監視手法の高度化が図られた。また、2017年5月末以来の「カタール危機」では、サウディアラビアやUAE系のメディアが、根拠に乏しい反カタール報道を大量に流し、それらの国々によるフェイクニュースの問題にも注目が集まった。以上の事実を鑑みて、本研究では「アラブの春」が、情報化への適応の限界を示す出来事というよりも、むしろ中長期的に考えた場合には、統制監視手法の高度化が図られる機会になったのではないかという仮説を立て、このことを湾岸産油国の事例から検討した。

### 2. 研究の目的

本研究では、高度情報化時代に対する権威主義国家の適応という問題を、世界的に見ても情報化が進む湾岸産油国の事例分析から論じた。とくに、本研究では「アラブの春」を前後としたメディアに対するノメディアを通じた統制監視手法の連続性とその高度化という問題に着目した。他地域の事例も参考にしながら、情報化が権威主義国家を強化する可能性や条件を探る。ただし、国家間での相違も存在すると考えられるため、本研究では湾岸産油国の統制監視手法の特徴を浮き彫りにし、それを「湾岸モデル」として提示することで、今後の権威主義国家の対象とした比較メディア・システム研究を進めるにあたっての足掛かりを築くことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、具体的に以下の3点を解明することを目指した。そこで、本研究ではメディア・コミュニケーション研究、地域研究、政治学の3つの研究分野を横断しながら研究を進めた。

(1) 「湾岸の権威主義国家による多チャンネル化への適応戦略」の解明： 現在の中東では衛星放送やデジタル放送の普及に伴い、多チャンネル化が進んでいる。衛星放送に限定しても、1000を超えるチャンネルがある。そして、その多くが湾岸産油国の資本投下を受けたものである。本研究では、湾岸産油国が自国の影響下にある企業家を通じて、現在の多チャンネル状況をいかに飼い慣らしているのか、またそれが体制の持続や安定をいかに助けうるのかを、とくに政治コミュニケーション研究のなかの政治経済学的アプローチ、英語やアラビア語の資料、現地調査を組み合わせて分析した。

(2) 「湾岸の権威主義国家による多メディア化(とくにインターネット)への適応戦略」の解明： インターネットと SNS をめぐる状況に焦点をあてて、湾岸産油国がそうしたメディアを監視や社会統制にいかん利用しているのかを明らかにした。その際には、主に監視研究とインターネット政策研究の議論の枠組みを援用した。ただし、これらの研究には先進国を対象としたものが多いため、近年の中国やロシアを事例とした先行研究を渉猟し、そこで得られた分析枠組みを湾岸産油国の事例に援用した。また、民主主義国家と権威主義国家間での統制監視技術の移転・共有にも着目し、日米欧で開発された技術が権威主義国家における統制監視手法の高度化を助けうる可能性についても検討した。

(3) 統制監視手法における「湾岸モデル」の提示： 湾岸産油国に見られるメディアに対するノメディアを通じた統制監視手法やその高度化には、中国やロシアといった他の権威主義国家と

の共通点が多い。そこで、本研究では以上の(1)と(2)から得られた知見を、中国やロシアにおける状況と比較することで、それらの相違を浮き彫りにし、今後の権威主義国家を対象とした比較メディア・システム研究の足掛かりを築いた。具体的には、権威主義国家内部の統制監視手法の比較検討を行ったうえで、湾岸産油国内部の多様性を踏まえながらも、その共通点や特徴をまとめて「湾岸モデル」として提示した。

#### 4. 研究成果

##### (1)2019 年度

湾岸諸国(なかでもアラブ首長国連邦)とエジプトでフィールドワークを行い、メディア関係者への聞き取り調査と、図書館や書店などでの資料収集を行った。また、現地調査で得られた情報と資料をもとに研究成果をまとめて、日本マス・コミュニケーション学会 2019 年度秋季研究発表会(2019 年 10 月 26 日、於:江戸川大学)や、東京大学中東地域研究センター2019 年度公開セミナー(2019 年 11 月 23 日、於:東京大学)などで発表を行った。さらに、その成果を論文にまとめて学術書籍へと寄稿した。

##### (2)2020 年度

新型コロナウイルスの世界的まん延により当初予定していた湾岸産油国(カタル、オマーン、クウェート)でのフィールドワークを実施することができなかったが、国内で入手可能な外国語書籍とデータベースを活用するかたちで研究を進めた。研究の成果や作成したデータベースをもとに、日本マス・コミュニケーション学会 2020 年度秋季研究発表会(2020 年 10 月 11 日、オンライン開催)で企画ワークショップ「リベラル的文脈の外縁から眺めるメディア・国家・市場」を企画立案し、中東の事例について研究報告を行った。また、研究成果を論文にまとめて複数の学術書籍へと寄稿した。

##### (3)2021 年度

新型コロナウイルスの世界的まん延により当初予定していた湾岸産油国(アラブ首長国連邦、バハレーン)とエジプトでのフィールドワークを実施することができなかった。そこで、国内で入手可能な外国語書籍、オンラインでの現地協力者を通じた情報収集、さらにデータベースを活用するかたちで研究を進めた。研究の成果や作成したデータベースをもとに、日本マス・コミュニケーション学会 2021 年度秋季研究発表会(2021 年 10 月 06 日、オンライン開催)で研究報告を行なったほか、日本国際政治学会 2021 年度研究大会でもコメンテーターを務めた。また、研究成果を英語と日本語でそれぞれ論文にまとめて寄稿した。

##### (4) 2022 年度

新型コロナウイルスの影響によって中東地域でのフィールドワークを十分に実施することができなかった。そこで、国内で入手可能な外国語書籍、オンラインでの現地協力者を通じた情報収集、さらにデータベースを活用するかたちで研究を進めた。研究の成果や作成したデータベースをもとに、日本中東学会 2022 年度年次大会(2022 年 5 月 15 日、於:早稲田大学)で研究報告を行なったほか、その成果を公開講演会やシンポジウムで発表した。加えて、研究成果を 2 本の論文にまとめて学術誌に投稿し、査読を経て掲載された。

##### (5) 2023 年度

新型コロナウイルスの影響により、研究期間を 1 年延長した。それにより、2023 年度にはアラブ首長国連邦とカタルでフィールドワークを実施することができた。現地で収集した書籍や資料をもとに、研究を進め、その成果を海外の学会で発表した。

研究期間を通じて、1 冊の共編著、4 冊の共著(分担執筆)、6 冊の事典/データブック等への執筆、4 本の学術論文(査読あり 3 本、査読なし 1 本)の執筆したほか、3 件の国際学会/国際ワークショップでの報告、毎年 1 回以上の国内学会への登壇・研究報告を行うことができた。とくに、中東メディアに関する英語の Handbook に論文を掲載することができたことは、大きな研究成果であると考えている。

本研究課題を通して、情報化と情報部門の民営化がともに進む湾岸産油国にあって、権威主義的な政府がメディアを管理統制するメカニズムの一端を解明することができた。それにより、権威主義体制下のメディアについての研究に理論的貢献ができたと考えられる。また、湾岸産油国のメディアと政治の関係を解明できたことで、中東の政治を考えるうえでの新たな視角を提供できた。第 3 に、中東のメディアと文化に関する国際的なハンドブックに中東のニュースメディアについての論文を掲載したことで、研究の成果を国内だけでなく、国外にも広く発信することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 千葉 悠志	4. 巻 102
2. 論文標題 補助線としての脱西欧化論 メディア研究の再定位に向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 メディア研究	6. 最初と最後の頁 67～83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24460/jamsmedia.102.0_67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉 悠志	4. 巻 16
2. 論文標題 イスラームが新たなメディアと出合うとき メタパースという経験	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究	6. 最初と最後の頁 116～130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉悠志	4. 巻 535
2. 論文標題 中東における報道統制 近年の動向と統制方法の多様化に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中東研究	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉悠志	4. 巻 54
2. 論文標題 世俗化の力学はいかに「翻訳」されたのか 宗教復興に至る中東メディアの水脈とその変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 メディア史研究	6. 最初と最後の頁 92-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 千葉悠志
2. 発表標題 中東諸国における情報部門の民営化とその政治的意味 エジプトの事例を中心に
3. 学会等名 日本中東学会第38回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 千葉悠志
2. 発表標題 「理論と場 メディア研究の理論とその脱西欧化をめぐる議論」「非欧米圏におけるメディア研究の発達と現状 中東の場合」
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2021年度秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千葉悠志
2. 発表標題 中東における放送市場の自由化と政治変動 エジプトの事例から
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2020年度秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千葉悠志
2. 発表標題 テレビ時代におけるイスラーム思想 / 知についての考察 高まる企業家の役割
3. 学会等名 第35回日本中東学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千葉悠志
2. 発表標題 湾岸諸国と放送メディア 国際関係がつくりだす放送産業のかたち
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2019年度秋季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千葉悠志
2. 発表標題 湾岸メディアの歴史と構造
3. 学会等名 東京大学中東地域研究センター・2019年度公開セミナー「アラビア半島の歴史・文化・社会」第7回（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chiba, Yushi
2. 発表標題 Authoritarian Regimes' Response to the New Media Environment: The Case of Middle Eastern Countries
3. 学会等名 Forth International Conference on Communication & Media Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chiba, Yushi
2. 発表標題 Close Encounters of the New Media Kind? Muslim Intellectuals' Reaction to the Metaverse
3. 学会等名 BRISMES Annual Conference 2023, (国際学会)
4. 発表年 2023年

## 〔図書〕 計11件

1. 著者名 NHK放送文化研究所(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 NHKデータブック 世界の放送2023	

1. 著者名 イスラーム文化事典編集委員会(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 イスラーム文化事典	

1. 著者名 西尾哲夫・東長靖(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 317
3. 書名 中東・イスラーム世界への30の扉	

1. 著者名 NHK放送文化研究所(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 392
3. 書名 NHKデータブック世界の放送2022	

1. 著者名 千葉悠志・安田慎(編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 248
3. 書名 現代中東における宗教・メディア・ネットワーク イスラームのゆくえ	

1. 著者名 近藤洋平(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学中東地域研究センター	5. 総ページ数 260
3. 書名 アラビア半島の歴史・文化・社会	

1. 著者名 中村覚(監修)、末近浩太(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 シリア・レバノン・イラク・イラン(シリーズ・中東政治研究の最前線 2)	

1. 著者名 鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 中東・オリエント文化事典	



1. 著者名 NHK放送文化研究所(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 NHKデータブック 世界の放送2021	

1. 著者名 NHK放送文化研究所(編)、千葉悠志、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 データブック世界の放送2020	

1. 著者名 Joe F. Khalil, Gholam Khiabany, Tourya Gaaaybess, and Bilge Yesil eds.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 John Wiley & Sons	5. 総ページ数 576
3. 書名 The Handbook of Media and Culture in the Middle East	

〔産業財産権〕

〔その他〕

個人ウェブサイト <a href="https://urabayashi.jimdofree.com/">https://urabayashi.jimdofree.com/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------